



令和 8 年 7 月 27 日(月)
しなやかに生きる子ども

3 学年 体育科
「ゲーム ベースボール型
ベースボール3 3つ星カップ」

**「もっと遠くに飛ばすために、下から打ってみるよ。
しっかり下から打っているか、見ていて。」**

どの子どもも得点することができるよう、ベースボール5を基に簡易化した【ベースボール3】を行いました。ベースボール型の特性である、セーフかアウトかのワクワク感を味わうために、得点によって塁間の距離を変更したり、仲間からの送球をアウトゾーンで捕りやすくするための用具を使用したりしました。

本時は、「ゲームで勝つために、自分はどのような打ち方をしようかな。また、チームでは、どのような守り方をしようかな。」と、チーム内で作戦を選択しました。「僕は狙った所に打てるから、ライン際を狙って、たくさん得点を取るよ。」「たくさん得点を取られたくないから、みんなで後ろの方に守ろう。」と、自己や相手に合わせ、攻め方や守り方を考えました。ゲーム→作戦タイム→ゲーム→作戦タイム→ゲームとすることで、ゲーム結果を基に作戦を考える姿が見られました。

私たちは、自分の意思をもって粘り強く学ぶ力強さと仲間の考えを受け入れながら学んでいく柔軟さを兼ね備えた「しなやかに生きる子ども」を育みます。そのために、他者とながかり合い、“うれしい”を見いだす学びを大切にしていきます。多様な個を認め、高め合いながら学べるように「教材化」「教師の立ち位置」の二つの視点から、子ども一人一人を大切にしたい授業の在り方を探っていきます。

視点1

多様な個が生きる教材化

本単元では、送球を捕りやすくする用具の使用による簡易化、自分の課題に合った練習の場の設定、ゲーム前の作戦タイムの確保などの手だてを打ち、誰もが「打つ練習をしてたくさん点数を取りたい。」「狙った所に投げてアウトに出来るようになりたい。」と、自分のやりたいに向け、動き出すような学びを目指しました。

単元の初め、塁間を短く設定することで、学級全員が得点をする喜びを味わうことができるようにしました。さらに、学級全員が得点できるようにしたことで、「次は、塁間を長くして得点の方法を変えたい。」と、自分達でルールを考える姿が見られました。

また、ゲーム前に必ず作戦タイムを設定し、自分がどのように打ちたいのかを友達に伝える場面を保障することで、「すきまに打ちたいって言うていたよね。あっち側には守りがいいから狙って打ってみるといいよ。」と、互いの考えを尊重しながら、関わり合う姿が見られました。



- ・簡易化のための用具
- ・自分の課題に合った練習の場
- ・仲間の考えが見える作戦ボード



自分のやりたいを
記録しておく
学習カード



仲間のやりたいを基に
関わる姿

多様な個が生きる教師の立ち位置

視点2



どの打ち方や守り方を選択したのかが子ども同士も教師も分かるように、作戦ボードや学習カードを使用しました。子ども同士で互いの考えを見えるようすることで、動きを見合うときのポイントにすることをねらいました。教師は、「なぜ、その攻め方や守り方を選択したのか。」を問い、子どもの意図を明確にする関わりをしました。「もっと遠くに打てるようになりたい。」という思いをもつ子どもに対しては、スキルアップの時間に技能面での指導をしたり、遠くに打つことのできる子どもとの関わりを促したりしました。また、ゲーム前に必ず作戦を教師と共有する時間を設けました。そうすることで、教師は子どもがどんな意図で作戦を選んでいるのかを見取ることができました。それを基に、自分の狙った通りの動きができた児童を価値付け、上手くいなかった児童に対しては、作戦の軌道修正や技能面での指導などの手だてを打ち、子どもが動きの良さを実感できるようにしました。

体育科 1年「さるとつばめとこうもりと（鉄棒を使った運動遊び）」より

視点1

多様な個が生きる教材化

本単元では、与えられた技の達成を目的とするのではなく、「こうやったら楽しそう。」「こうしたらもっと面白くなる。」などと、子どもが自分で鉄棒を使ってできる動きをつくり出していける学びを目指しました。体を振動させる「さる」、腕や腹で体を支持する「つばめ」、逆さになる「こうもり」の三つの動物（技）のみ単元の初めに提示し、個の自由な発想で動きの幅を広げたり、高めたりできるように単元を展開しました。

毎時間、教師が自作の絵本の読み聞かせをすることで、子どもはこんな動きができそうだという意欲とイメージをもちながら、一人一人が動きを考え、技能を高めることができました。子どもたちは様々な動きを見いだすため、見付けた動きは全体交流の中で紹介したり、写真で掲示したりするなどつながり合うための手立てをとることで、「友達の動きと同じだ。」「ぼくも同じようにやってみたい。」という思いをもつ姿が見られました。



見方・考え方を働かせるための教師の立ち位置

視点2



どの動物になりきって運動しているのかが子ども同士も教師も分かるように帽子に自分が選択した動物のバッジを付けて取り組むようにしました。教師はその動物の動きの特徴を考えながら運動を行っているかを見取り、同じ動物同士で遊んでいる子、違う動物と遊んでいる子、それぞれの遊びの面白さや動きの特徴を価値付けるようにしました。

単元の途中から「みえーるブック」というツールを活用し、子ども同士でお互いの「運動を見る」活動を取り入れました。誰が・どんな動きをしていたかを教師が問うことで、友達のよい動きを見付けながら自分の動きにも生かせるようにすることをねらいました。考えた動きを教師や友達に見せる場面を意図的に設定し、動きのよさや工夫を価値付けながら全体へと広めるようにすることで、友達の動きを模倣したり、動きを揃えたりしながら他者とながらつながり合うことができました。

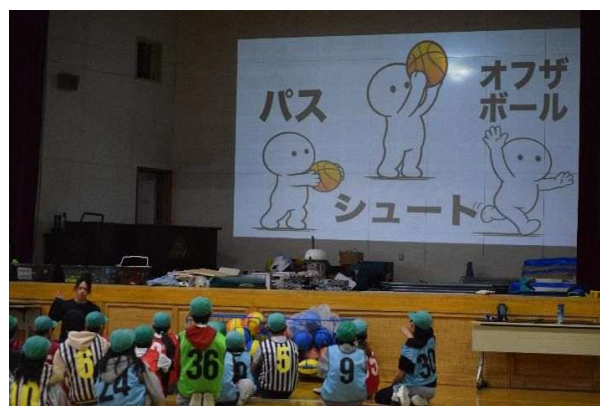
体育科6年「ボール運動ゴール型 ～ボールを繋いで、ゴールを目指せ～バスケットボール」より

視点1

多様な個が生きる教材化

本単元では、「得点しやすい位置までボールをつなぐこと」に迫るため、ゴール下に「無敵ゾーン」を設置しました。これにより、守備者に妨げられずにシュートを打てる場面が生まれ、どの子もゴールを決める喜びを味わえるとともに、そこに至るパスやオフザボールの動きが得点と結び付くことを実感できる環境を整えました。また、ハーフコート3対2とオールコート3対3の二つのゲームを設定し、自分の目指す動きや思いに応じてゲームを選択できるようにしました。

本時では、「ベストプレイ動画」を手掛かりに「どの動きでゴールにつなげるか」を選択しました。選択した動きが得点につながった場面では、自分の動きのよさを実感する様子も見られました。一方でルールの特約化によって、味方のオフザボールの動きがあってもドリブルで運ぶ場面も生じました。攻防の展開の速さというよさもあることから、今後は目的に応じて子ども自身が選択できるルール設定へと高めていく必要があります。



多様な個が生きる教師の立ち位置

視点2



単元を通して、ゲーム中に「見る役割（ミカタ）」を位置付け、ペアが意識した動きがどのように発揮されているかを他者の視点から捉える仕組みを設定しました。単元が進むにつれて、評価は抽象的なものから、シュート・パス・オフザボールの知識を根拠とした具体的なものと変容していきました。

これを基盤として本時では、教師は「見る役割」の横で共にゲームを観察し、ペアの具体的な動きのよさを価値付けたり、課題を示唆したりしました。その立ち位置により、ゲーム後にはペアで、選択した動きについて根拠をもって評価し合う姿が見られ、他者からのアドバイスを手掛かりに自分の動きを捉え直すことができました。他者とながら合いながら、自身の動きの良さを実感することへとつながりました。一方で、ペアの助言のみでは課題解決が難しい子もあり、その際には教師が個別に動きを確認する立ち位置をとることで、思考の整理を支援しました。